1月1日　ルカによる福音書２章２１～４０節　今日の説教から
説教題：「あけましておめでとうございます！」

今日の個所には特徴的な二人の人物、「シメオン」と「アンナ」という人物が出てきています。彼らについてはルカ福音書にだけ記されています。この福音書の著者であるルカは、医者であり、使徒言行録の著者でもあります。彼はユダヤ人だけではなく、異邦人のためにもこの福音書を執筆しました。だからこそ、他の福音書よりも、より多様な出来事に対して「これも福音書に含めるべきだ」という考えを持っていたようです。

最初に出てくるシメオンは、「イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた」という、珍しい記述がされています。福音書において、聖霊はイエス様の誕生と洗礼に関係する箇所で登場します。洗礼者ヨハネがイエス様について聖霊と火によって洗礼を授ける方であると説明した箇所や、イエス様が洗礼を受けたその時に、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエス様の上に降ってきた、という場面で登場しています。ただ、やはり聖霊という言葉が積極的に使われるようになるのは使徒言行録２章のペンテコステにおける聖霊降臨の出来事以降であります。イエス様が伝道を始める前、洗礼を受ける前の段階で聖霊が注がれている珍しい人物が、このシメオンという人物でありました。

同じように、アンナという女預言者がエルサレム神殿で祈りを捧げていたところ、イエス様に近づいてきて賛美の声を挙げました。彼女も預言の力を発揮して、この幼子がエルサレムの、人々の救いのためのこの世に与えられたことを証ししました。記述そのものはシメオンよりも少ないのですが、この時代に女性にスポットライトが当てられている時点でただ事ではありません。人数を数える時には成人男性しか数えない、それほどまでにユダヤ社会は「成人男性」中心の社会でありました。女性であるだけで神殿の奥までは入れない、神様から遠ざけられていた時代に、女性にも確かにイエス様の救いが届くことがこのアンナによって示されているのです。

私たちの神様は、多くのユダヤ人が思っていたような、「ユダヤ民族だけの神様」でもなければ、「律法を守る人の神様」でもありません。神様が唯一であるというその事実だけでも、老若男女関係なく、信じる宗教も国籍も関係ない、「すべての人の神様」であることが明らかであります。性別も異邦人も関係なく、すべての人に愛を注ぎ、すべての人のためにイエス様をこの世に送って下さったかたが、私たちの神さまなのです。それはもはや、私たちの感情も関係ありません。私たちが憎む者に対しても、私たちにとって「敵」としか思えない人に対しても、神様は愛を注いでくれています。すべての人が悔い改めて、神様の言葉に従って、イエス様のことを信じることが出来るようにと、どのような人に対しても愛を注いでくれているのです。私たちはその愛を信頼して、その愛に感謝をして、すべての人に「あなたが救われるためにイエス様は生まれたのだ」「おめでとう」という言葉を届けることが、期待されているのです。

「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」。そう語り掛けてくるイエス様の言葉が、私たちに対して響いています。だからこそ私たちは、どのような時代であっても、どのような困難があっても、希望を失わずに歩み続けることが出来るのです。私たちには、どこに行っても、どの時代においても神様が共にいてくれています。その喜びを胸に、今週一週間の、これから一年間の歩みを共に進め始めましょう。

今日の説教箇所：ルカによる福音書２章２１～４０節

- 21:八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

- 25:そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。――あなた自身も剣で心を刺し貫かれます――多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

- 36:また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとっていて、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。